

『ピースメーカー』 - 浮葉裕司

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

視界が瓦礫に覆い尽くされていた。建物、道路、港だったものが、無残にも残骸となつてあちらこちらに転がっている。地面もひび割れ、視界の至る所から黒煙が上がり、空は灰色にくすんでいた。荒廃、という言葉をもそのまま眼前に表現したような、そんな世界が目の前に横たわっていた。

遠くで轟音が響いて、誰もが無意識に音のした方へと目を向ける。空からは大小様々な何かの残骸が、滝のように落ちてくる。その光景を目撃した人々の小さな集団が、身を震わせながら一つに固まっていた。

この世の地獄にしか思えなかった。

誰がどこで何を間違えたのか、いつからこうなったのか。きっかけは分かるのに、こうなった真の原因、諸悪の根源がどこにあるのか分からない。そんな自分たちを追ってくるのは、まるで理不尽としか思えない現実。民衆が理解できていたのはただそれだけ。どこからともなくまた悲鳴が上がり、追いかけるように爆音が鳴り響く。ごうんと大地が揺れる。

何があつてこうなったのか？ そしてこれからどうするべきなのか？ 分からない、と分かっているながら、それでも誰かに聞かずにはいられなかった。訴えられずにいられなかった。

——私たちの楽園はどこに消えた？

その国の西の国境付近、一番近い街からも少し離れた、静かな小さな山のてっぺん。そこに、その研究所はある。抱える研究員は、白髪の老人が一人、そして彼につき従うロボットが一体のみ。研究員だけでなく建物にも少しばかり年季が入った、とても小さな研究所。

そこがこの国の中心だ。

西暦にして二二〇〇年、人間の持つ技術は突然に、新たな局面を迎えることとなった。百年前に冗談半分で語られていた夢のような近代都市。それはいつしか国民の手のひらの中にあつた。車が飛ぶのも二千キロで走るのも当たり前、事故も渋滞すらもなくなった世間において、信号機と呼ばれていたものは数十年前にその役目を終えた。マイクロ単位の技術は、百年前の水準からさらに三単位先まで開発し尽くされた。そしてその技術が投入され完成した首都には、雲を突き刺すほどに高い塔を中心に、きらびやかな機械仕掛けの摩天楼が立ち並ぶ。

人間とロボットが一つ屋根の下で暮らすのは当たり前、一家に一台万能ロボがいる時代。それを実現したのは新たに発見されたエネルギーと、それを恒久的に使い回せる循環システム。人間の悲願は次々と達成されていった。そしてあと少し時が経てば、ついに火星に人が住めるようになるという。しかしこれほど無意味な夢はない。火星に行きたい、ここではないどこかに行ってしまいたいなんて、この国の民衆はそんなことは思っていないだろう。誰もがこの国に、今に満足している。

数世代前の誰かによって語られてきた夢を全て叶え切り、SFファンタジーでしか描かれなかった世界が現実となつて、人々の前に顕現した。額面通りの超近代都市。

この楽園の作り手こそが、そのぼろい研究所の二人の研究員であつた。二人のうち人間の方の名はトヒルといい、今やその名には発明王の冠がついてまわる。この国の発明品の三分の一は彼が作った。そして残った三分の二を作つたのは、相方のロボットの方である。

そのロボットは元々単純な軽作業を行う、この時代ならどこにでもいるような工作ロボットであつた。一家に一台いるような安価で無個性なロボットだった。しかしトヒルは、それに自身が持っていた最高の技術を注ぎ込んだ。思考するための人工知能と世界中の知識、そして体中に、工作に必要な技術を次々と載せ続けた。結果、それは誰かの命令で、ではなく自分で考えてものを作れるようになった。

それの前に材料を置きさえすればいい。望みのものを作るために必要なものを、必要なだけ。そうして後はベッドに横たわり、暖かい毛布を被って、タイマーを三十分くらいにセットして昼寝をとっても構わない。その間にそれは勝手に、望みの品を作り始める。しばらくした後タイマーがピピピと鳴って、ベッドから体を起こせば、目の前には求めたものが完成されて置いてある。それが例え六歳児の工作レベルのものであっても、はたまた未だこの世に存在しない水準のものであっても、材料さえあれば何でも作れる。そこに例外など存在しない。

トヒルはその有能な相方に「ピースメーカー」という名を与えていた。ピースメーカーがこの国に足りないものを作れるように、足りないピースを埋められるように。そしてピースメーカーの発明品を使った人たちが皆幸せになれるように。"PieceMaker"であると同時に、"PeaceMaker"でもあってほしいと。

彼らはどんなものでも作って、そして街には誰も知らない発明品が溢れた。この世のどこにもなかったそれらは、小さかったこの国を急激に発展させた。世界の誰もがその国に注目し、誰もがその技術水準に感嘆した。全ての不自由を発明によって埋め尽くしたこの国は、いつしか楽園と呼ばれるようになり、誰もがそれを羨んだ。

トヒルがピースメーカーに願った通りにこの国は回っていた。国はいつだって平穏だ。国民は笑顔に溢れている。何の問題もそこにはなかった。

それでもトヒルは周囲に初心を忘れたくないからと言い、街の中心には住まずに国の辺境で暮らしている。そしていつも新たな発明のために研究所の地下に閉じこもる。そのため滅多に街の中心には出て来ない彼らが、国民たちと顔を合わせる機会はそう多くはない。

それでも誰もが知っている。彼らはこの国を創造した、神に等しいほどの存在であることを。

世界中から楽園とうた謳われたこの国には、強いて挙げるならたった一つだけ汚点がある。国の頂点に立つ、選ばれた一人の人間についてのことだ。

国の首都のさらに中心、世界で最も高い塔のさらにてっぺん。そこにあるけんらん絢爛ごうか豪華な一室にふんぞり返る王様は、お世辞にも政治が上手いとは言えなかった。家臣との信頼はとうに失われてしまい、いつも誰かに身勝手ばかり言い、無理難題を押し付けて、臣下だけでなく国民すらも散々振り回していた。彼が王様になってから二年近くが経っていたが、もしここが普通の国ならば、一カ月もしないうちに王様の名前が変わっていたかもしれない。それほどまでに、王様の治世は不評だった。

そんなひどい評判の王様が、これまで王様としてこの国の真ん中にいられたのは、ひとえに発明王たちのおかげと言っても過言ではない。

王様は彼らにも、当然のように多くの要求をした。あれを作れ、これをよこせと体だけ大きな子供のように繰り返した。しかし彼らはそんな王様の理不尽な要求に対して、常に完璧な答えを作って与えてしまったのだ。雲の上までそびえるこの王様の居城も、トランボリンの様に弾む鉄のフロア、百キロ先まで見える双眼鏡、岩を紙のように切れるハサミ。他にも王様が望んだ何もかもを彼らは作ってしまった。

あなたたちは人が良すぎる。そんな彼らにいつだって民衆は訴えた。これ以上あれを甘やかしてはいけない、と。多くの民衆には、世界一大きな王様の住まいが、世界一大きなゆりかごにでも見えていたのだろう。それでもトヒルとピースメーカーは王様の希望通りにもものを作り続けた。もし彼らがその気になってこの求心力を振りかざせば、あのような王様にかしず傳かずとも、ましてや独立建国さえもできるだろうに。

それでも皆がトヒルたちを徹底的に糾弾し、何が何でも止めよう、ということにはなかった。どんな理不尽な要求だろうと、彼らは最終的にはどうにかしてしまうからだ。自分たちのところまで、迷惑と書かれたお鉢が回って来たことは、ただの一度たりともなかったからだ。

愚鈍な王様と聡明な発明家、彼らのいびつ歪な関係はこうしてしばらくの間続いた。以前は王様が突き付けた要求が風の噂で世間に流れる度に、「そんな要求は無茶

すぎる」と国民の殆どが彼らを案じていた。しかしいつしか、誰もが王様の荒唐無稽な要求と、それに対して彼らが提示する世紀の解法を楽しみにしていた。パーティーの余興のような雰囲気。誰もが皆王様の悪口を散々言いふらしながらも、結局王様は愛されていたのかもしれない。

最もそれは多分、悪役としてではあったけれど。

——今回ばかりは、お応えすることができません。

突然パーティー会場は凍りついた。トヒルはその日、初めて王様の要求を拒否したのだ。いつものような「これを作れ」と「分かりました」のやり取りを見ることになる、とその場にいた誰もが思っていたから、皆があんぐりと口を開けた。

その日の王様の要求は、少なくとも今までのそれを思えば非常に簡単な類のものだった。雲の高さを飛び越える天国に最も近い塔を作る方が、金属の性質をまるっきり無視した、跳ねてうねる鉄の床を作る方がよっぽど難しいことに違いないことは素人でも分かる。難しい操作も、希少な材も必要ない。ただ何も考えることなく、ピースメーカーの目と鼻の先にポンと材料を置いてやれば、トヒルがベッドに入って眠りについてしまう前にでも、王様がお望みの品をピースメーカーは作り上げるだろう。それでもトヒルには受け入れられない理由があった。

王様の要求とは、「武器の製造」。

トヒルとピースメーカー、彼らは誰からも称賛される存在だ。同時にその存在を羨望されてもいて、世界中の誰もが彼らの技術を欲しがった。そして彼らも来る相手を選び好みすることなく、彼らに作れる技術や品を、頼まれる度にあげていた。どの依頼人にもいつでも平等であるようにと気を遣いながら。

取引の中で多少のいざこざが起きたとしても、最終的には丸く収まった。彼らは約束を破らない。頼めば必ず、彼らは望みの品を作ってくれたからだ。そして同時に誰もが彼との関係の悪化を恐れていたから、彼の言うことには素直に従った。欲しいものがもらえなかったらたまらない。強引に迫れば、世間体が悪くなる。誰もが正當に、整然と順番を待っていた。

これまでは。

それでも満足しきれない、少しばかり強欲な人間がいつだってどこかにはいる。発明王とその技術を独り占めしたいと願う、そんな人間たちの勢力が現れた。さらに悪いことには、彼らはこの国から実力行使でそれを奪い取ろうとしていた。世界一平和でもあった楽園は、突然戦争の危機に直面した。

トヒルは争いをひどく嫌っている。彼が若かりし頃の話だが、当時の仲間と作ったロボットたちが、他国で知らぬ間に軍事転用されていた。心血を注いだ自分の発明品が、人間を打倒し、ロボットを破壊していた。戦争が終わった跡に赴いて、返り血でボディを濡らした自分たちのロボットを見て、彼らはひどく絶望したのだ。だからトヒルは自身の最高傑作に、ピースメーカーと名前をつけたのだ。

技術という技術のほぼ全てを彼らに依存してきたこの国には、それ故当然のように戦闘機や戦車の一台はおろか、爆弾の一つもありはしない。軍事に関してのみならば、その水準は周りのどの国より低いかもしれなかった。せいぜいが、警察が持っている数百本のピストルだけ。それはトヒルの理想だったが、もし万が一にも何かに攻められた時、対抗手段は殆どなかった。

「この国が攻められてもいいというのか！」

王様は怒気で声を荒げてトヒルに今にも組み付かんとする。普段馬鹿にされている王様も、この国の弱点くらいは知っていた。だからこそすぐに、真っ先に彼らに頼み込んだ。その弱点をすぐに埋められる彼らに願った。しかしトヒルは全く表情を崩さない。二人がにらみ合うような状況が続き、先に目を逸らしたのは王様だった。俯いた王様に、トヒルが言葉をぶつけた。

「彼らが私の技術が欲しいと頼むならば、与えてあげればよいでしょう。兵器以外であるならば、私とピースメーカーは何でも作ります」

落ち着いた、しかし迫力のある低い声。それが沈黙を乗り越えて王の部屋に響く。

——そうじゃない。

——狙われているのは技術じゃない。お前だ、そしてピースメーカーだ。

そう彼に叫びたいはずなのに、気圧されてしまった王様の口からその言葉が出てくることはない。臣下やトヒルたちに散々甘やかされ続けてきた王様は、他の誰かに否定される感覚を忘れてしまっていた。ひどくショックを受けていた。簡単に折れてしまった。

臣下たちも加わってあの手この手で説得しても、トヒルは全く聞く耳を持たず、視線の一つさえも動かさなかった。我に返った王様が、いつも要求する時よりもさらに高圧的に命令しても、逆に下手に出てひたすらに頼み込んでも、彼の目の前にいくら金を積んでも、彼は首を縦に振ることはない。焦りが重圧となって、だんだんと肩のしかかってきて、全身におもりをつけられたようだった。

今戦争になれば恐らく勝てない。勝てたとしても国は大きく傷つくことは間違いない。せっかく手に入れた楽園を失いかねない。王様は何としてでも戦争を避けたかった。しかし頼みの発明王は頑として協力してくれない。降りるはしごは初めから用意されていない。

王様は、王様になって初めて追い詰められていた。

機械が金属のような硬いものにぶつかって音をたて、そして何かが焼かれたような臭いが地下室に充満している。その中にいても、年老いた研究者の集中は一切途切れない。

あの日以来、トヒルは研究所から一步も出ることなく発明に明け暮れている。その光景そのものはいつも通り。しかしトヒルは普段より遥かに鬼気迫りながら目の前の素材と向き合っていた。どうしても、今すぐに、完成させねばならないものが彼にはあったのだ。自分やピースメーカーが狙われている。明らかになったその事実の裏側にある、それ以上に重い懸念が彼を一心不乱に動かしていた。

そもそもトヒルからすれば、こういった状況に陥ることそれ自体には、ある程度は覚悟ができていた。いずれ強欲で傲慢な人間が現れることは、自然と理解できている。だてに長生きしてはいない。この世を見てきてはいない。人間なんてそんなものだ。同じ人間だからこそ、一番よく知っている。

それに奴らが、自分たちと技術を全て独占したいと言っているのは、単なる脅し文句だろうとも感じていた。もしそうして本当に戦争を起せば、周りの国が黙っていない。その全てを敵に回すことになるだろう。世界一の発明家と、強欲な小勢力。世間がどちらに味方するかくらい、彼らも分かっているはずだ。トヒル自身も自分の立ち位置くらいは自覚している。

ただ、万が一のことを考えると身の毛がよだつ思いだった。もしその欲しがりたちが考えなしの無鉄砲な無法者で、なおかつそんな人間たちに技術を、ひいてはピースメーカーを奪われて悪用される、忌避すべきケースのことを考えると頭が痛かった。

トヒルはピースメーカーに武器を作らせないだけであって、ピースメーカーが武器を作れないわけではない。むしろ、その程度の工作はピースメーカーにとって朝飯前で、時も場所も選ぶことなく危険な武器をすぐに量産できる。やろうとさえ思えば、世界中の国と言う国、人間という人間をじゅうりん蹂躪できる軍隊を一週間以内に手元に用意できるだろう。

——それを作り出すための材料が目の前に出てきてしまったら、ピースメーカーを誰が止める？

——いや、誰も止められないだろう。ピースメーカーを使いこなせるのは、世界中にトヒル一人だけだ。世界は一週間後に、想定通りに消えてなくなるはずだ。

ピースメーカーにかせ枷をつけなければならない。もし自分がその場になくても、ピースメーカーにブレーキがかかるように。使いこなせるのは私だけなら、止められるのも私だけだ、そうトヒルは確信していた。

そのためには多くの材料と技術が必要で、さらにとても複雑で、繊細な作業もしなければならなかった。普段の発明とはわけが違う。今必要としているそれはトヒル、ましてや人間が使うものではなく、ピースメーカーが使うものなのだから。だからこそ、間違いは許されない。自分がない時に使われるものなら、なおさら。

それなのに時間の余裕は決してありはしない。結果ここ数日、トヒルは一睡たりともすることはできなかった。万が一のことが起きる前に、それを作り終える必要があったからだ。そしてその万が一が、どこまで迫っているかも分からない。遙か彼方にいるのか、それとももう自分の隣に佇んでいるのか。その疑念が彼の脳細胞を駆り立てた。

最中にピースメーカーの方を見ると、イガグリののような棘々しい形をした黒い球体を手に取って、作りたての食用フライパンの底をかかんと叩いていた。調理したものをフライパンごと食べられる、街の子供以外からの評判はいまいちだった発明品。肝心の味が悪かった、商品化するならば改善必須。それでもまさにそれは、平和そのものの発明品。その戯れに、お前はのんきだな、と静かに笑い声をたてた。

トヒルはそうして作業台に戻り、最後のパーツをはめて、最後のねじを締め終えた。あとは、この出来あがった首輪をピースメーカーに結わえ付けるだけだった。

思わず欠伸がでた。完成したことへの安心感からか、溜めこんだ疲労が全身に襲い掛かってくる。ピースメーカーに組み込むのは少し休んでからことにしよう。入れるだけなら簡単だが、間違いなく修正を入れなければならないだろうから。そのために、まずはちゃんと働く頭を取り戻さねばならない。ピースメーカーが戯れていたあのフライパンも、イガグリののような黒球も、休んでからしっかり見てやることにしよう。今の自分の頭で判断するのは逆に危険だ。

内心急いでいる自分をそうして納得させて、完成したパーツを頑丈な金庫に入れる。そして嚴重に鍵を閉めた後、トヒルはベッドにもぐりこみ、久しぶりの長い眠りにつくことにした。

敵が進軍し始めた。

誰より早く情報を掴んだ王様が塔の上から地上を見下ろすと、小さな人の塊が五つ六つとこの国に矛先を向け進んでいた。

王様は動揺した。彼の想像していた集団は、もっと小規模で、貧相なものだったからだ。だが見るにぎっと千人は下らないし、皆が皆武装している。まさかこれだけの勢力が来るとは、と消え入りそうに嘆いた。誰よりも安全な場所にいるのに、王様はこの国の誰よりもろうばい狼狽した。

トヒルはまだ折れないのかと怒鳴っても、臣下の反応は全くない。王様だって内心は理解しているのだ。彼は助けにならないだろう。どれだけ連絡を入れても全く反応しない。要件が分かっているので、無視されているのだろう。

王様はいてもたってもいられずに、数人の護衛をつけて、塔を下りて外に出た。そして街を這いずるようにしてぐるぐる歩き、武器を作れそうな人を探した。それでも代わりに助けてくれる者はいない。この国には、彼ら以外の発明家も技術者も殆どいないのだ。それに数少ない技術者は皆、王様が望むものを作れる技術を持っていない。彼らがいては商売にならないからと、優秀な者は皆散り散りになってしまっている。もうこの国には、王様に戦う力を与えられる者は誰一人として残っていなかった。

トヒルに頼み込むしかない。説き伏せるしか道はない。気付けば王様は研究所の前にいた。あれだけトヒルと会っていないながら、トヒルの研究所まで来たことは初めてで、ぼろぼろの研究所らしき建物を見て目を疑った。しかし何度臣下に確認しても、ここがそうだと言われる。にわかには信じきれなかった。なぜこんなところにいるのかまるで理解できなかった。

王様は長いチャイムを何度も鳴らすが、誰も反応を返してくれない。きっと私には会いたくないのだろう。それでももう、彼しかいないのだ。王様たちは延々と玄関前で待ち続けた。そして数時間が経ち、辺りが夕闇に染まる頃に、王様はついに諦めて塔に帰ろうと道中を引き返す。遠くから見える研究所は、その距離以上に遠くに感じた。

その時、突然地面が揺れた。何事かと思えば、次にはくぐもったような轟音が二度、三度と辺りに響き、その度に地面がまた大きく揺れた。思わずその音がした方を見ると――研究所から空を覆うほどの煙が上がっていた。

その情報は瞬時に、形容しがたいほどの衝撃と共に世界中を駆け回る。死因不明、爆発らしきものに巻き込まれた、人間らしきものの体はもう人間としての跡形もなく、この国が誇るどんな技術をもってしてもどうにもならなかった、と王様は涙ながらに発表を行った。翌日にはすぐに、国葬級の葬儀が開かれた。この国全体が泣いていた。

——犯人は明らかだ。

——あの薄汚れた強欲な人間たちが、私たちの宝を奪い去った。

——これで黙ってられるものか。

——私は許すことは到底できない！

——では君たちはどうなんだ！

葬儀が終わって数日経っても、心にぽっかり穴が空いた国民たち。彼らを前に、王様は高らかにそう放った。警察からも、大臣からも、犯人はあの強欲な魔人共だ、と宣言された。

——彼は戦いを望んでいないかもしれない。

——しかし、私たちはもう一人の発明王を守らなければならない！

——彼まで奪われるわけにはいかない！

王様の演説はだんだんと興奮の色を帯びてくる。王様は初めて、王様として国民に訴えかけていた。そしてそれは穴の空いた人間たちに強く響く。王様の言葉が初めて国民に届く。共通の敵を持って初めて、彼らは通じ合い、彼らの視線は一致した。

あの爆音の後すぐに、王様たちはトヒルの研究所に駆け戻った。数人の臣下たちがドアをぶち破り、研究所の中をくまなく探す。重苦しい黒色をした大きな扉と共に、地下室はすぐに見つけられた。王様は一瞬ちゅうちょ躊躇したのち、懐から一本ハサミを取り出した。いつも護身用に持ち歩いている、岩でも切れるハサミ。あわよくばこの扉も切れないかと、その刃先を突き立てると、少しずつだが穴が開いた。どうやらかなり脆くなっているようだった。

人ひとり入れるくらいの小さい穴を開けて、その中を這うようにして中に入る。瞬間、強烈な臭いと黒煙が王様に迫ってきて、思わず鼻を歪める。それでも手で煙を払いながら部屋の中ほどまで進むと、何かにこつんと手が当たった。

ピースメーカーだ。

ピースメーカーは確かに無事だった。ガラクタだらけになったその部屋の真ん中で、何事もなかったかのように鎮座していて、その一点だけ時間も止まっているように思えるような姿だった。原型をとどめて残っていたのはピースメーカーと、部屋の隅にあった小さな金庫だけだった。

それだけだったのだ。

そこにいるはずのトヒルが見当たらない。ベッドらしきものの上にある人間らしい形をしたそれは、まさか彼ではないだろうな、と王様は最悪な結末を疑わずにはられない。何もできずに、ここに入ってすぐに臣下が呼んでおいた調査隊を待ち続けた。

しかしその後、それがトヒルの焼死体であることは証明された。彼の作った技術によって、それが嘘をつかないことは、王様が一番よく知っている。この時だけは、この発明が失敗であってほしいと願ったが、持ち込まれたいくつもの機械が残酷に真実を示していた。王様はやがて悟って、天を仰いで諦めた。

トヒルの遺体を託した後、王様たちは初めて、ピースメーカーを研究所の外に連れ出した。より安全なところに置く必要があった。彼を守るトヒルはもういない。だから今、せめてこの国の最も安全な場所へそれを匿おうとした。

ピースメーカーは王様の住む塔の、雲を見下ろす最上階の一室を与えられ、そこはそれの新たな研究所と化した。すぐに王様とともに臣下たちが部屋に入り込んできて、その目の前にいくらかのものが置かれた。金属の塊、電子機器類のガラクタ、数十本のゴム材のようなもの、そして大量の火薬。彼らの言外にある要求は、言葉にされる必要のないほどに単純で明確だった。ピースメーカーは与えられたものを順番に一瞥した後、すぐに彼らの要求に答えようとその手足を動かす。ティーブレイクの

暇すら与えない間に、ピースメーカーの隣で待っていた王様たちの眼前には、両手に収まるくらいの、幾本もの針を纏った黒い球体がまず一つことんと置かれた。

しかし王様にも臣下たちにも、それが何だか分からない。与えた材料から考えても、その黒い球体は爆弾だとしか思えないのだが、それ以外の情報が彼らには何も掴めなかった。彼らが推理する間に、今度は棒状の、さっきの球体の数十倍大きな鉄の塊がどすんと音をたてた。

その後も臣下たちが昼夜問わずにピースメーカーの目の前にあれやこれやを運び込む。眠りを知らないピースメーカーは延々と何かを作り続けて、王様の大きな机の上には次から次へと完成品が山となって積まれていく。そしてその山の殆どが、王様たちにとって、名前の分からない何かでしかなかった。

この頃雲の下には、朝も晩も人々が塔の周りを何重にも囲っていた。早く攻めろ、敵を討て、といっきか一気呵せい成に騒ぎたて、その怒号は天まで響いてくるようだ。あの演説から間もなく一週間が経つ。王様が一時は埋めた彼らの中の空洞が、また少しずつ開き始めていた。その穴を埋めるための、やりきれなさをごまかすための無自覚な狂騒。王様が焚き付けてしまった国民感情は、王様の想像以上の爆発を起こしていた。そしてその感情が生み出した光景に、王様は思わず引いてしまっていた。王様は最初から、彼らを舐めていたのかもしれない。

王様は戦争が怖かった。だからこそ戦争が迫ってきたあの時に、王様は軍事力を持ちたくなかった。ピースメーカーが持つ技術をもってすれば、どの国よりもよりも強い力を持てる。そうなれば、この国は誰にも攻められない。楽園は永遠に終わらない。彼の願いはそれだけだった。ただ安心が欲しいだけだった。あの勢力は動かない。ならこちらから攻めて刺激しても、とさえ考えていた。

しかし同時にこうも考えた。武器そのものを嫌っていたかの発明王が死んだ次の瞬間に武器を作り始めたら、国王としての立場が危ないとも。それではまるで自分が発明王を殺したようではないか。もしそれでこの楽園が守れたとしても、そこに自分の居場所はきっとなくなるだろう。この塔のてっぺんには、きっと違う人間が住むことになる。下手をすれば、楽園から放逐されるどころか、この世にもいられなくなってしまおう。王様にとっての自分のそんな姿は、想像するに難くなかった。

理由が欲しかった。故に、王様は敵を作った。都合よく彼らを狙っていた強欲たちを、この犯人に仕立て上げた。実際に彼らが殺したのかは分からないが、仕立てることそのものが重要だった。

国民は張り裂ける寸前までフラストレーションを抱え込んでいる。あれだけ大きく言い放っておきながら一向に敵を討とうとする気配がないのを見て、彼らはまたも王様に不審の目を向けていた。以前のような呆れではなく、怒りを。ぶつけどころのない感情が、矢となり槍となり王様に突き付けられていた。

形だけでも見せてみる。雲の下に時折降りると、そこから見える外の風景が、そう迫っているように見えた。彼らの姿が王様の胃に、体に、心に衝撃を与え続けていた。王様は今にも体内から焼け落ちそうだった。

王様の目の前、机の上に山となっている正体不明の物体。恐らく何かしらの武器のはずだ。あの集団の居場所は知っている。見つけ出すことくらいは造作もないことだ。だからやろうと思えばいつでも攻撃できる。

王様は彼方を見つめた。敵とした強欲たちがいるはずの方向を見据えて、またも苦悩した。

もし今から、目の前の山から一個だけを使って見せれば、眼下にすら見えない彼らの怒りは収まるだろうか。

その日王様が繰り出した数人の臣下と一台のとうてき投擲ロボットが、かの欲深い人間たちのところに向かった。そのうち一人は両手で、黒く鈍く光った、いくつもの突起を持った球を持っていた。ピースメーカーが王様の目の前で初めて作ったあの球体だ。

臣下たちがそれぞれ顔を見合わせる。黒い塊はロボットの大きな腕の上に置かれた。照準がぴつたりと設定され、いつでも投げられる状態にされる。そして三カウ

トの合図とともに、ロボットの腕が高速で振られ、放られた球は一直線に飛んでいく。

次の瞬間には、標的の中心からまばゆい光が彼らの視界に入ってきた。

——そして次の瞬間、彼らもまた飲み込まれた。

たった一つの黒い球体は、小さな山一つくらいの規模を消し去った。ピースメーカーを狙っていた敵もろとも、地面をえぐ抉り、緑を燃やし、広大な更地をあっという間に作り上げた。伝えられたその威力は、怒りに染められ、せんめつ殲滅を叫んでいた国民たちさえも一瞬のうちに黙らせた。国内だけにとどまらず、世界中を震わせた。世界一の楽園が、その裏側に恐るべき化け物を隠していたと。

王様もまたその一人であった。あれだけ小さな球一つがああ状況を引き起こすならば、自分の目の前にある兵器の山はどれほど恐ろしいものなのか。何を引き起こすのか。王様はがたがたという震えが止まらなかった。

そのうち、近くの国からも遠くの国からも、何人もの来客がやってきた。王様や大統領。いつもの国際会議で王様が見知った人たち。彼らは王様に対して一様に口を揃えた。一緒に来たわけでもないのに、誰もが同じ言葉を王様に投げつけた。

——その武器は危険すぎます。

——一つのところに置いておくのはいけない。

——我々と共同で、協力して管理しましょう。

王様は、そう言った誰の目からも強い欲を感じずにはいられなかった。誰もが目をぎらつかせていた。そして明らかすぎるほどに、彼らは王様を見ていなかった。彼らの視線は王様の奥に積まれた、発明の山に向けられていたようにしか思えなかった。

王様は臆病だ。彼らの目を見た王様は、彼らを全く信用することができずにその誘いを全て断った。彼らにこれを与えてはならない、と本能が警鐘を鳴らしていた。王様はそれに素直に従った。

同時に、王様はもうピースメーカーに発明させないと決めた。あの力を使わないのは惜しい。しかしそれ以上に、いつ間違っって危険な発明をされるか分からない。それに、それが危険かどうかを判断できる者ももう、この国にはいなかった。本当はピースメーカーを壊してしまうのが一番いいのだろうが、その方法も王様は知らない。一度壊そうとしたことはあるが、失うのが惜しくなってすぐにやめてしまった。それを失えば、この楽園も、自分の立場も維持できない。仕方がなく、研究所と化した一室にピースメーカーを閉じ込めた。何も作れないように、部屋にはピースメーカー以外何も入れずに孤独なままにして。

トヒルは誰よりもピースメーカーのことを知っていた。彼はきっとピースメーカーが作った全てのものに目を通していて、そして発明品の中に危険なものがあれば、世間に流れる前に秘密裏に処理していたのだろう。王様は今になって初めて、彼の存在の大きさが身にしみた。そしていくつもの後悔をした。何度も挑発するかのよう无理難題をふっかけたこと、武器を作れと散々迫ったこと。それに、全てを投げつけて、自分は何も分かろうとしなかったこと。

——私はどこから間違ってしまったのだろうか？

そう呟いても、誰も教えてはくれなかった。

——あの国は危険だ。

——放っておいていいのか？

——しかし、どうするんだあれを。

——楽園だと思っていたのに。

——全くだ。我が国の目標だった。

——私たちの脅威になるなら取り除かねばならないな。

——協力すればあるいは。

——こんなことはしたくないのだが。

ピースメーカーが作り上げた兵器の山は、ピースメーカーがいる部屋とはまた別の部屋に隔離された。これらも本当は処分できればよかったのだが、王様にはその方

法は分からなかった。

そして机の上には、王様を悩ませた山の代わりに、以前尋ねてきた目のぎらぎらした国家首脳たちからの贈り物が置かれていた。それは山ではなく、たった一枚の紙切れ。それでもその一枚が、山に負けないくらいに王様を苦悩の底に引きずり込んだ。『国際社会の平和を保つべく、我々は貴国の所有する兵器を責任ある立場で共同管理することを決議しました。従わなければ、我々としては本意ではありませんが強硬な手段をとるでしょう——』

王様は以前から首脳たちを信用していなかったが、この一枚でその感情は完全に不信に変わった。天秤の皿は地へと着いた。

王様は悩みながらも、静かに憤っていた。王様は彼らに何もしていない。むしろ、これまでこの国は彼らに欲しいだけの技術を与えてきた。その施しがこうなってこの国に帰って来た。王様には、彼らもあの野蛮な人間たちと変わらないように見えた。

ふと、王様は気付いた。

彼らが欲しいのは技術であり、そして多分、力だ。そのために、ピースメーカーが作った、この国が見せつけたあの黒い爆弾のような力が欲しい。

もしこの国からあの強烈な兵器たちが世界にばら撒かれれば、必ずどこかの国が戦いを起こす。数百年前に、誰かが起こしていたように。そしてそうなった時、真っ先に狙われるのはこの国であり、ピースメーカー。いくらでもあの黒い球体を作り出せるこの国だ。そうならば私の楽園は失われるだろう。王様はそれだけは理解していた。

トヒルが世を去ってから、王様は常に何かに追い詰められている。時には外敵、時には国民、そしてピースメーカーからも。やってられない、と王様は苦笑が止められなくなった。

突然地面が揺れた。コップがテーブルから転げ落ちて、アイスティーを床にぶちまけた。慌てた王様が階下に降りて行き、地面が見えるところまで来て、地上を見下ろす。

楽園という名には全く似合わない黒煙が、街から数筋上がっていた。

王様は双眼鏡を取り出した。街の入口に数台の戦車らしきものが、そして国境の手前には大量の人とロボットの群れ。遠目に見た彼らは皆、見たことのないような重装備だった。

王様は耐えきれなくなり膝から崩れ落ちる。自分の楽園が、手のひらから滑り落ちていく。虚無感と焦燥が、背中に纏わりついて離れない。どうすればいいのだろうか。どうすればよかったのだろうか。眼下に広がる光景を見下ろしながら考える。王様の中で後悔と疑問符が混ざり合う。

臣下が走って自分のもとにやってきて、何かを大声で伝えても、王様は膝をついたまま。たくさん周りに集まってきて、周りが騒がしくなって、そしてようやく王様は立ち上がった。

そして地上の世界に背を向けて、臣下たちを押しつけて、天に向かって上り始めた王様の腹は決まっていた。悲壮な表情を浮かべる彼の手には、二本の鍵が握られていた。

最上階。神様に最も近づける部屋。王様は二つの扉を開いた。二度と開けることはないはずだった扉が開かれ、「それ」はまたも解放される。枷が勢いよく外され、施した封印が解かれる。

王様にはもう、戦うしか道は残されてはいなかった。

気が滅入るような戦いが続いた。連合を組んだ他国の首脳たちは、物資と人員に頼った総力戦を仕掛けてきた。一方の王様は、たった一体のロボットが持つ技術力にしか頼れない。ピースメーカーに全てを託した戦い。それでも戦線がこう着したのは、発明品の理不尽な威力、そしてそれへの警戒心からだろう。こうして泥沼のような戦いに発展し、互いに抜け出せなくなっていた。

ピースメーカーに捧げる材料が枯渇しそうになった王様は、自身のきらびやかな部屋も、発明王からせびりとった発明品も、もう一体の発明王に差し出した。楽園と呼ばれた街の姿はもう跡形もなくなっていて、守りたかったものの姿はもう誰もの眼前

から消え去った。それでも王様はまだ折れてはいなかった。

ピースメーカーがいれば大丈夫、また一から作り直せばいい。トヒル程上手くはできなくても、時間はかかっても取り戻せると信じていた。王様だけでなく、巻き込まれた国民たちにも、それが最後の希望の証だった。彼らはまたも手を取り合った。トヒルが死んだ後のあの数日のように、彼らの意志は再び繋がった。

そして彼らは戦い続けた。もう引くに引けないところまで来ていたのだ。あちらこちらで爆音が轟き、戦車のような何かの街の跡をさらに蹂躪しながらぶつかり合った。平和だった世界から、数か月のうちに星の数ほどの人間とロボットが消えていった。

王様は苦悩していた。いくら兵器を作らせて、いくら敵を倒しても、次から次へと敵が湧いてくる。その様子に王様は戦慄を覚えた。相手の技術よりも、強烈な武器よりも、それを使う人間たちが恐ろしくてたまらない。圧倒的な士気の高さ。以前は高かったあの塔の下から、戦えとシュプレヒコールを上げていた彼らと同じにしか見えなかった。

ピースメーカーを脅威としていた敵たちは、それが作った武器で攻撃されたことで気圧されるどころか発憤しているように見えた。自分たちの仲間が幾人も幾体も倒れて、その脅威を身に叩き込まれた彼らは、それでもなお屈することなくこの国の中心へと歩を進めた。今やらなければいつかやられる。その考えが彼らを支配し、アドレナリンを出し続ける。はた目から見れば狂気に映る行軍は、指揮官の意志でなく兵の意志によって行われていた。

このままではいけない。負けてしまう。そう王様は悟り、狼狽した。こちらの士気はだんだんと落ちてきている。当たり前だ。むしろ敵の方がどうかしているのだ。

何か形勢を変える手段はないのか。戦いに負けて、ピースメーカーが私の前から消えてしまったら、私の樂園はなくなってしまわないか。

そうして落ち着きなく辺りをぐるぐる回る王様は、ふとあることを思い出した。

——確かトヒルの研究所から金庫も回収したはずだ。

王様は金庫のもとに駆けた。回収した金庫はトヒルの遺品として、その扉を開けてはいなかった。それは当時の王様なりの礼儀だったのかもしれないが、今の王様にそんな余裕はない。頑丈そうな金庫ではあったが、爆発で脆くなっていたのか、以前研究所の扉を切ったハサミで切り落とすことができた。

扉を外すと、中から大量の札束が出てきた。それを見て、自分が与えたものだと感じた。トヒルが要求を受ける度に、王様は材料費として莫大な金を与えていた。きっとこれはその余りだろう。だがもう、この状況では金など意味を成さない。目もくれずに奥をまさぐるともう一つ、とても小さなチップのようなものがきれいに包まれた状態で出てきた。

王様は初めて、彼らの発明品を誰より早く理解した。簡単な話だ。わざわざ金庫にしまって管理しなければならぬほどに重要な品。そしてこのチップのような形。きっとピースメーカーの新たなパーツだ。

その部屋を離れて、王様は以前より短くなった廊下を、階段を全力で走る。エレベーターを待っている余裕はなかった。そしていつものように発明を続けているピースメーカーの肩部分を掴んで揺らした。ボディを触りたくって、ついにはピースメーカーの胸部分を開いた。胸の中には膨大な量のパーツと導線とともに、細いポケットのような穴があった。

多分、ここにあのパーツを入れるのだ。

確証はない。だが、それに懸けるしかなかった。それほどまでに王様も、戦線も追い詰められていた。もう一刻の猶予もなかった。

意を決して、王様はそのポケットにチップを差し込んだ。瞬間、ピースメーカーは一度飛び上がるような動作をし、機能を停止した。王様が不安な表情を浮かべる。私はまた失敗したのか。落胆と共に王様が零す。その言葉と同時に、ピースメーカーはまた静かに動き出した。

さっきの表情が嘘のように、王様は舞い上がった。自分のやったことが間違っ

いなかったことに興奮し、歓喜した。

ピースメーカーは周りを見渡した。そして、まず手始めに目の前にある、完成寸前の発明品に手をかけた。王様も、追いかけてきた臣下たちも、その一挙一動を見守っていた。さらに強力なものを、この戦況を変えられるものを作ってくれるのか。そんな期待感で部屋中が満たされた。

しかし次の瞬間、ピースメーカーは手に取った発明品を分解した。体中のツールを使って、目の前のものをまた最初の材料の状態にしてしまった。部屋の中だけ時間が凍りつく。眼前で繰り広げられた光景に、誰一人として反応できず、状況を飲み込めてもいなかった。その間にもピースメーカーは、周りにある完成品を次々と分解した。ミサイルのようなものも、爆弾も、小型戦車も何もかもをただの金属の塊に戻してしまった。

臣下たちがついに我に返って、ピースメーカーを止めにかかった。明らかな異常事態に、誰もが気付いていた。ものを作るはずのものが、今日の前で自分が作ったものを壊している。真逆ではないか。これでは、ピースメーカーが敵に回ったみたいではないか。

ピースメーカーは自分に向かってなだれ込んできた人間たちを突き放し、払いのけた。気付けば部屋から全ての完成品が消え去った。

そしてピースメーカーはおもむろに自分の胸部を開けた。周りにいる全ての人間が茫然と傍観する中、ピースメーカーは指から出てきたドライバー一本で、自らの胸を突き刺した。導線の数本がぶちぶちと切れる音がして、ピースメーカーはその場に音をたてて崩れ落ちた。

永遠に続くかのような戦争がようやく終わりを迎えた。ピースメーカーがなくなって、互いに戦う理由はなくなったのだ。連合軍の戦力が壊れかけの塔に乗り込んだ時、そこには王様はいなかった。今でも、彼がどこにいるのか分からない。

かつて楽園とさえ呼ばれた街は、無残に跡形もなくなっていた。数か月前までそこにあった、摩天楼がそびえ立ち、一目先も二目先にも建物と機械が目白押しだった視界はすっかり見晴しがよくなってしまった。あの双眼鏡がなくとも、百キロ先まで見えそうに思えるくらいに。

かつてピースメーカーだったもの、さらに残っていたいくつかの発明品は次々と解体された。そこから何か技術進歩に繋がるものはないかと、どの国の専門家も躍りになって調べたが、仕組みまでは分かっても、肝心の作り方は全く分からない。多くの調査が、いかにトヒルとピースメーカーが凄まじい発明家であったかを知らしめるだけに終わった。

しかしその中で僅かながらも解明されたことがある。ピースメーカーの胸から発見された一枚のチップのようなパーツ。それは、与えられたロボットが「物事の危険性を知る」ためのものだったという。ピースメーカーは、目の前にあった「危険」な武器を分解して、そしてそれを生み出した「危険」な自分自身を壊したのだろう。与えられたプログラムに、それは機械的にのっとただけだ。故に、本当に戦争を止めたのはピースメーカーでなくトヒルであった、と伝えられた。

以前街があったそこには、着実に平和が戻ってきている。発明王がいない分、非常にゆっくりとしたペースではある。けれど、いつか復興が叶うかもしれない、誰もがそう願いながら歩を進めている。今はいない彼らに頼りきりだった民衆たちも、今では自分の体を動かして、前に進もうとしている。ぼろぼろに傷ついた街の残骸の中にもがいている。とはいえ彼らなしでは、間違いなく以前の楽園は戻ってこないし、それどころか遥か昔にあった水準まで戻すのがやっとになるだろう。それでも今眼前に広がる、残った人間たちの懸命な姿は、それもまたトヒルが願った世界の一つでもある。彼の望んでいた方向に、彼らはだんだんと戻り始めていた。

——ただ一つ、懸念があるとすれば。

多くの発明家や技術者、専門家たちが、今は亡き一人と一台の発明王の技術を研究している。今はまだでも、何世代か先の未来にまた発明王が現れて、第二のピースメーカーが生まれるかもしれない。それを狙う人間が現れるかもしれない。使いこなせ

る人間が現れないかもしれない。それでも、あの楽園を再び作るためにそれを使う人間は間違いなく現れるだろう。その力に目をつける人間たちも。そういうものなのだ。その時、この荒れた楽園の跡を見たことのない人間たちはどうするのか。

——これがまた繰り返されるのか、それとも。分かっているけど、もしこうなった時、彼らはピースメーカーの代わりにそれを決断できるのか。次に生まれるそれは、"PieceMaker"であるだけでなく、本当の意味での"PeaceMaker"になれるのか。

その答えは、ここにいる誰も知らない。

[戻る](#)